

誰にも起き得た悲劇

③ 拉致問題と群馬

同じ空の下で 憲法記念日に考える

北朝鮮が弾道ミサイルとみられる機体を発射した4月13日。拉致被害者やその家族を支援する市民団体「救う会・群馬」の事務局長大野敏雄さん(76)は、心が重かった。

妻のトシ江さん(79)が務めている。別名だった支援組織のころを含め、今年12月で活動開始から丸10年という月日が流れる。13日は朝からテレビにかじりついた。その日、大野さんは記者に訴えた。「失望と脱力を感じての10年目。拉致被害者や家族はいないが、実は群馬と拉致は関係が深い。私たちも高齢。もっと多くの県民に関心を持ってほしいんです」



大学生らに講演した後、報道陣の質問に答える横田滋さん、早紀江さん夫妻—2011年11月、高崎市

体制移行を機に北朝鮮が柔軟路線に転じ、拉致問題も徐々に好転するのでは、と期待していたからだ。救う会・群馬の代表は、

勤務した。母の早紀江さん(76)はクリスチャンで、市内の教会に通った。そこで大野夫妻と知り合い、友情を育んだ。早紀江さんにとって、群馬時代は子育てが一段落した時期。初めての、夫婦2人だけの生活だった。職員寮は、めぐみさんが見つからない寂しさをまぎらわそうと始めた油絵が、

部屋を占領した。教会のバザーで、人形や洋服を裁縫して出品。老人施設で週2〜3回、おしめをたたむボランティアにも励んだ。群馬を離れてから、めぐみさんが北朝鮮に拉致されたことがわかった。支援を訴えに群馬を訪れるたび、在任時に交流した人々が集まり、励ましてくれた。「第二のふるさと」。早紀江さんは群馬をこう呼ぶ。めぐみさんは13歳だった77年、新潟県で拉致された。部活動を終えて帰宅途中。自宅近くだった。

早紀江さんは言う。「いつもの、普段と変わらない生活のなかで突然、拉致された。あと10分帰りが早かったら……。誰にでも、あの悲劇は起き得た。群馬はもちろん、日本全体の問題だと思っています」

民間団体の特定失踪者問題調査会は現在、全国で約270人の特定失踪者をホームページ上で公開している。特定失踪者は、理由なく突然姿を消し、拉致の疑いが完全には排除できない人たちを指す。群馬県出身の特定失踪者は3人おり、その家族がいまも県内に住んでいるという。井上イトノさん(88)は前橋市在住。71年12月、21歳の時に行方不明となった井上克美さんの母親だ。克美さんは埼玉県川口市で消息を絶った。県内の工業高校を卒業後、川口の電

気工事会社に勤めた。同僚との忘年会の後、行方がわからなくなった。会社では有能な従業員と期待され、妻は長男出産の直前。正月には前橋の実家に帰ると言っていた。失踪する理由は見当たらない。

イトノさんは15年ほど前に心臓を悪くし、毎日薬を飲む。最近はお腹が痛み、動くのもままならない。「年をとった。時間がな」。先行きを不安がる。救う会・群馬は、脱北者を群馬に招いての勉強会(非公開)を6月に開く。拉致や特定失踪者問題への関心を高めたい。そのためにも、北朝鮮の内情を正しく知る必要がある。そう考えたからだ。もうすぐ5月3日。大野さんは言う。「国民の生命は守られているはずなのに」。憲法記念日が近づくと毎年、そう思ってしまう(木村浩之)

県民の関心促す「国民の生命は守られているはずなのに」